論文

人間関係形成能力過程における規範意識形成に関する一考察

―地域コミュニティの「対話」を通して―

教職支援センター　檜垣　公明

抄録

現代の子どもたちの行動について規範意識の希薄化が指摘されている。規範行動はこれまで自分を支えてくれた身の回りの人々の言動（社会的絆体験）に深く影響を受けており、自己の規範化は個人の認知発達としてその規範行動に価値を見出していく形として現れる。しかし、それが集団（社会）の規範化に発展していかない限り、規範意識は形成されていかない。

本論文では、自分を支えてくれる身の回りの人々の規範行動の影響を要因 1、個人の認知発達の過程でその規範行動に価値を見出すことを要因 2、集団（社会）規範としての認知の行動化を要因 3 として表し、人間関係形成能力過程として規範意識が形成されていくことを明らかにしようとしている。現代の子どもたちに現れている規範意識の希薄化は集団（社会）の規範化に発展させていく機会や場が弱いからであると考えている。要因 1➡要因 2➡要因 3 への人間形成に関する循環サイクルを教育の場で確立していく必要がある。そのためには、学校の枠を越えた地域コミュニティの「対話」へ発展させていくことが必要である。

キーワード

人間関係形成能力

規範意識形成

社会的絆体験

地域コミュニティの「対話」

人間形成に関する循環サイクル

はじめに

中央教育審議会の答申等において、現代の子どもたちの行動について規範意識の希薄化が指摘されている（1)。規範意識の希薄化に関する研究の立場には、社会変動に伴い社会における価値が変容した結果と認識する立場（2）と、個体の認知発達に由来する発達プロセスの一部であると考える立場（3）があるが、社会意識の変化の影響を受けながら個人の認知発達の変化として捉えていかなければならないと考えている。規範行動はこれまで自分を支えてくれた身の回りの人々の言動（社会的絆体験（4)）に深く影響を受けており、自己の規範化は個人の

認知発達としてその規範行動に価値を見出していく形として現れる。しかし、それが集団（社会）の規範化に発展していかない限り、規範意識は形成されていかない。

本論文では、大学生アンケートにおいて、自分を支えてくれる身の回りの人々の規範行動の影響を要因 1、個人の認知発達の過程でその規範行動に価値を見出すことを要因 2、集団（社会）規範としての認知の行動化を要因 3 として表している。人間形成に関する循環サイクル図においては、要因 1 を心の基盤形成、要因 2 を自己理解形成、要因 3 を他者理解形成として表し、大学生アンケートの要因 1・要因 2・要因 3 にそれぞれ関連させて表現している。規範意識が、人間形成に関する循環サイクルにおける要因 1➡要因 2➡要因 3 への人間関係形成能力過程として形成されていくことを明らかにしようとしている。自己の規範化形成はその土壌（社会的絆体験（5））としての要因 1 の影響を受けて要因 2 へ発展していくが、規範意識の形成のためには集団（社会）の規範化として、要因 2 から要因 3 へ発展させていく必要がある。現代の子どもたちに現れている規範意識の希薄化は集団（社会）の規範化に発展させていく機会や場が弱いからであると考えている。要因 1➡要因 2➡要因 3 への人間形成に関する循環サイクルを教育の場で確立していく必要がある。本論文は規範意識形成に関して、人間関係を重視する先行研究として、C. ギリガンの「ケアの倫理」を踏まえている。C. ギリガンは、L. コールバーグが道徳的発達段階（3 水準 6 段階）の低位に位置付けた第 3 段階（人間関係に価値判断の基準を置く。）に焦点を当てている。道徳性の発達を 3 つの段階に区分し、社会規範としての認知の行動化において人間関係の力学を最高位に位置付けている（6）。本論文は、社会（集団）の規範化のためには、規範意識が人間関係形成能力過程として「対話」を通してはぐくまれ、学校の枠を越えた地域コミュニティの「対話」へ発展させていく必要性があることを明らかにしていくことを目的とする。

１　規範意識形成について大学生アンケートから見えてくるもの

自己の規範行動について、最も影響を与えた要因として要因 1、要因 2、要因 3 の中から一つ選択させるアンケート（質問紙法）を実施した結果、次のようになった。

アンケート内容

要因 1…　その行動がこれまで自分を支えてくれた人々（家族や信頼する教師や地域の人々等、身の回りの人々）の言動と深くかかわっていると感じたとき

要因２…　その行動に興味・関心（問題意識）を示し、価値を見出そうとするとき

要因３…　その行動が学校や社会のきまりであると判断するとき

Ａ大学アンケート総数 237 名（2011 年 1 月実施）（7）　要因 1…140 名、要因 2…69 名、要因 3…28 名

要因 1➡要因 2➡要因 3 となるに従って数がほぼ半減していっていることがわかる。要因 1 と要因 2 と回答した者の理由には、相互の関連性に触れた深い考えが見られる。要因 1 と回答した者の理由には、自分を支えてくれた人々の影響が深く関係しており、自己認識形成への方向性として要因 2 への関連性についても言及している者が見られる。

要因 1 と回答した者の主な理由

事例 1

規範意識が行動化される大きな要因として、自分の身の回りの人々の行動や言葉が大きくかかわっているのではないかと考える。その行動の最初の一歩は、自分の家族、友人、知り合いに触れ合っていくことから始まる。そしてそこから発展していき、どんな人にも同じような行動や言動ができるようになっていくのではないか。最初からいきなり見ず知らずの困っている人に手を差し伸べるのは難しい。自分のできる範囲のことから実践していき、問題意識や自らの能力を高めていけるようにできればよいと考える。

事例 2

人が何かに気付き、それを行動として実践するとき、重要なのは人と人とのつながりである。規範について書物等にかいてあることは、書物等が一方的に私に押し付けるものであり、子どもたちはそのことに興味を示そうとはしない。人と人とのつながりにある他者を思いやる気持ちとして関係が成立したとき、子どもは初めてそのものごとに興味を示し、行動しようとする。子どもが自分のことを支えてくれていると感じるとき、そこにはまず人と人との人間関係が形成されている。子どもとはどんなに頑固な子どもであっても、信頼を寄せる人の言動には耳を傾けようとするのが普通であり、また裏切る行為に対しては罪悪感を抱くように、自分を客観視することができるのである。したがって私は自分を支えてくれた人々の言動と、教育として教えられた規範意識が一致したとき、人は規範意識を行動化することができると考える。

要因 2 と回答した者の主な理由

事例 3

規範意識が行動化されるとき、その行動に興味を感じたことが私の経験の中で最も多かったからである。問題意識があり、そのことについて何かの価値を見出そうとするとき、自然とその行動について規範意識が生まれるはずである。教師はそのことに気付くような教育をしていかなければならない。子どもはそれに気付くことが難しいからである。

事例 4

規範意識をはぐくむために一番必要なことは、その行動に興味を示し、価値を見出そうとするときであると考える。子どもたちは折り合いを付ける体験をし、きまりの必要性などに気付き、自分の気持ちを調整する力を付けることが大切である。ただ単に大人が「これは駄目だから駄目だ。」と頭ごなしに説明するだけでは、子どもたちの規範意識はいっこうに行動化されない。自主的に興味を示すということが必要なのである。子どもたちが主体的になり、関心を示すことによって、問題やトラブルを自分たちのことと捉え、感情を制御することや、折り合いを付ける必要性を感じるようになるのである。

また、要因 2 と回答した者の理由には、要因 1 の影響が要因 2 へ深く関係していることに言及している者が見られる。

事例 5

子どもは人にやらされてばかりでは、自主的、実践的な態度をとることは難しいと考える。自らが問題意識を持てたとき、感じたときに行動に移すだろう。要因 2 を選んだが、その行動に興味や価値を見出そうとするときは、要因 1 も含まれているようにも感じる。自分を支えてくれた人々の言動と深くかかわっていたから行動するというのは、支えてくれた人の言動を通してその行動に興味を持ったということだと思う。学校のきまりだから、人に言われたからというのは、まだレベルの低い話だと思う。その行動に自ら価値を見出し、行動してこそ自主的であり、実践的なものであると思う。

ところが、要因 3 と回答した者の理由には、要因 1 や要因 2 との関連性に言及した者がほとんど無く、学校や社会のきまりだから守るのは当たり前といった回答が多く、自分や他者とのかかわりで捉えようとしていない傾向が見られる。

事例 6

私は要因 3 の「その行動が学校や社会のきまりであると判断するとき」が、規範意識が行動化されるときの大きな動機となっていると考える。なぜなら、ルールや規範を守って行動することは人間として学校や社会の一員として当然のことだからである。これができなければ、学校や社会の一員として認められることはない。逆に、これをきちんと守ることができて初めて認められ、対等に扱われると思う。それに気付くことができれば、自然と行動化されると考える。

以上、要因 1、要因 2、要因 3 における典型的な考え方について紹介してきたが、要因 3 の理由になると、要因 1 や要因 2 との関連性が弱くなってくるのはなぜなのか。社会的絆が規範意

識形成にどのように影響していくのか（8）に焦点を当てて考えていく必要がある。都市化や過疎化といった社会変動に伴い、共同体意識が希薄になり、価値観が変容してきている中で、要因 2➡要因 3 への集団（社会）の規範化形成の過程について深く考察していく必要があると考える。

２　規範意識形成における社会的絆と個の認知発達過程の関連性について(「人間形成に関する循環サイクル図」を通して)

自己の規範化にはＴ．ハーシの「ソーシャル・ボンド理論」（9）にあるように、その形成土壌として社会の絆が大きな影響を与える。東日本大震災は、私たちが忘れかけていた社会的絆の重要性を教えてくれた。被災地から立ち上がろうとする人々の姿、その人たちを支えようとする多くのボランティアの方々の行動には「共に生きようとする」人間の本質に迫るものがあり、深い感銘を受ける。宮城県南三陸町では、津波災害で地域が壊滅状態になり、被災住民がばらばらになっている状況の中で、行政の力に頼らず老若男女が智恵を出し合い、役割分担しながら、生活基盤を立て直していこうとする動きが見られる（NHK、2011 年）（10）。そこには規範意識がある。規範意識の根幹をなしているのは社会的絆の強さである。

岩手県大槌町も津波によって町が壊滅状態に陥った。津波の発生した 3.11 に釜石市の高校にいた佐藤太地君（当時高等学校 2 年生）は故郷の多くの人々が被災したとき、自分は津波を見ていないということが彼の心を責めた。その後、母校である安堵小学校の同級生数名で安堵青年協力隊を結成し、被災地で炊き出しを始めた（朝日新聞、2011 年）（11）。岩手県陸前高田市の海音ちゃん（当時小学校 1 年生）はこの津波で父母と姉を失った。車で海音ちゃんを助けに学校へ車で向かう途中で母親と姉は亡くなってしまう。9 か月後、学校の運動会での徒競争の最中に、亡くなった母や姉や父の励ましの声が聞こえたことを初めて作文に書くことができた（NHK、2011 年）（12）。自分だけが生き残ったことが彼女の心を責めていたのである。子どもたちを取り巻く地域や温かい家族の絆がどれほど、子どもたちの心に深い影響を与えているかを教えてくれる事例である。

規範意識は人間関係形成能力過程の中ではぐくまれていくと考えている。社会的絆体験の深さが規範意識形成に大きく影響する（13）と考える。「人間形成に関する循環サイクル図」における要因 1（以下、循環サイクル図の要因と記す。）は、大学生のアンケート調査の要因 1 との関連性について説明している（要因 2 と要因 3 についても大学生アンケート調査の要因 2 と要因 3 に関連させている）。循環サイクル図の要因 1 の円内は「心の基盤形成」に関する人間関係の基礎としての「社会的絆」について説明している。心の基盤形成には、乳幼児期における家族や身の回りの人々とのかかわりが大きな影響を与える（14）。そして、その家族を取り巻く地域の人々の支え合い、児童期における友達や信頼できる教師のかかわり、思春期（青年期前期）や青年期における身の回りの人々とのかかわりの深さが、循環サイクル図の要因 2 へと一歩を

踏み出すエネルギーになってくる。支えられる体験によって情緒が安定し、意欲が高まり、問題意識が生まれる。循環サイクル図の要因 1 と要因 2 の円の重なりは、意欲と問題意識を表している。この点に関して事例 7 と 8 を取り上げる。

事例 7

支えられたことを体験するというのは本当に大事なことだと思う。誰かに見てもらっているという安心感は、同時に自分を支えてくれている人々、見てくれている人々への責任感へ繋がっていく。誰かが支えてくれているのに対し、自分はいい加減な態度はとれないし、とったらいけないと思う。逆にそう考えられるようになった時には、自分の中の規範意識は行動にも出ているのではないかと考える。これは大人になるにつれて身に付くものだと思うが、子どもに理解させるのは難しい。難しく説明するのではなく、大人は 100%の愛情で子どもに接してあげればよいのだと思う。そうすれば子どもは少しずつ理解してくれると思う。

事例 8

行動化、態度化には必ず、その要因となる出来事なり、事象がある。子どものように社会とのかかわりが弱い状態で生きる場合、自らが積極的に社会にかかわろうとする行動をとることが難しいと思われる。そんな中、自分のことを守ってくれ、見ていてくれる社会の人々の存在は子どもたちにとって、とても安心感を与える存在だと思う。一人でいたり、誰にも相手にされなかったり、自分のことを誰も見ていてくれないという状態は、年齢が低い子どもたちでも敏感に感じていると思う。子どもたちが成長する過程で、人々から受けた言葉などは、ただの言葉ではなく、子どもたちの本当の支えになっていると考える。温かい言葉を多く、長くかけてもらった子どもは相手の気持ちを感じられる子どもに育つと思う。自分が誰かに何かをするとき、今までの自分を支えてくれた人への思いが大切になると思う。

共同体としての意識が希薄になっている子どもを取り巻く今日の状況下で、社会的絆と子どもの認知発達のかかわりについて深く考えて取り組んでいく必要がある。循環サイクル図の要因 1 における「心の基盤形成」が充実してくると、問題意識が高まり、自己との対話を通して、自己理解が深まってくる。

循環サイクル図の要因 2 の円内は「自己理解形成」について説明している。問題意識は自己理解を深め、自分自身の行動に対して意味を見出そうとする。大学生のアンケートの要因 2 はここに関連している。「その行動に興味・関心（問題意識）を示し、価値を見出そうとするとき」というのは、個の認知発達過程で捉えると青年期に該当すると考えている。青年期はこれまで当たり前だと考えてきた既存の事象に対して疑問を感じる認知発達過程である（15）。事例 9、10 を取り上げる。

事例 9

最初は要因 1 を考えたが、自分の行動は自分の中で判断されるので、要因 2 を選んだ。学校や社会には多くのきまりがあるが、そのきまりを守る人と守らない人がいる。守る人は「こういうきまりだから」という理由で守っていることもあるだろうが、逆に守っていない人は、「何でこんな制度になっているのか。」と疑問に思って行動している人が少なくないだろうと思う。現に私は、納得のいかないきまりごとを守りたいとは思わない。そのきまりの意味や価値を判断してから行動したい。また、そういうことを考えずに言われるがまま行動している人は、自己決定力に欠けているとすら思える。

事例 10

学校や社会が決めたことを自ら進んで行動することは少ないと思う。社会が決めたことであり、自分が決めたことではないからである。これまで自分を支えてくれた人々の言動にかかわっているなら、行動する人も多数いるとは思うが、やはり、自分で興味を持ち、価値を見出そうとするときが進んで行動するときではないかと思う。

循環サイクル図の要因 2 と要因 3 の円が重なっている部分は問題意識の違いを整理・分類している状況下にあることを説明している。他者とのかかわりの中で自己を経験するといわれる。要因 3 は他者理解について説明している。東日本大震災が教えてくれるものは、他者とのかかわりである。宮城県南三陸町で被災した人々が高台の新しい土地に移転するという話合いになったとき、漁業を生業としている人々の間で様々な各戸の事情があったが、自分たちの生活をみんなの力で立て直していかなければならないという共通の目標の下に、まとまっていこうとしていた。本音を語り合いながら、それぞれの問題意識の違いを整理・分類して他者理解を深め、新しい街づくりの「きまり」を形成していこうとする姿が見られた（NHK、2011 年）(16)。

大学生アンケートにおける集団（社会）の規範化を考えるとき、既存の「きまり」が自分の生活とのかかわりで捉えられていない傾向が見られる。大学生アンケートの要因 2➡要因 3 への過程の中に、価値を見出しながら、集団や社会のきまりをつくり出していく道筋を見出していかなければならないと考える。人間関係形成能力過程の道筋を見出していかなければならない。その道筋が欠落してしまうと、きまりが何のために存在するのか自覚化されることのないままに、守られないから規範意識の希薄化だといった表面的な捉え方になってしまう。子どもの規範意識の希薄化が指摘される背景には、このような表面的な捉え方があるのではないか。社会意識の変動と個の認知発達の両面から、現実の問題について、子どもたちが本気で規範の意味を問う機会や場を設定していくことが教育現場には求められている。

３　自己の規範化形成から集団（社会）の規範化形成（人間形成に関する循環サイクルを通した地域コミュニティの「対話」）へ）

Ｌ．コールバーグは「ジャスト・コミュニティ」の中で「対話」を踏まえながら、集団の規範にかかわる現実の問題について、学校で討論させている（17）。しかし、集団（社会）の規範化形成は、学校だけではなく、地域コミュニティの「対話」へと発展させていかなければ形成されていかないと考える。地域における「ツバメの調査活動」を通して地域コミュニティの規範形成がどのように行われたのかを実践事例を通して検証する。

ツバメの調査活動は自然認識と社会認識形成の２つの観点を大切にしながら、少子高齢化が進むＢ地域の小学校(18)で始められた。自然との共生、人との共生、共に生きる中でこそ人間形成が図られていく。ツバメが自らの身を守るために人との共生を図るように、私たち人間も一人では生きられない。人と人とのかかわりが希薄になっている中で、人間関係を深めていくためには「対話力」を付けていく必要がある。そのためには学校の枠を越えた地域との「対話」が必要である。Ｂ 地域の小学校では児童の異年齢グループを組織し、ツバメの生態を調査するために各戸を訪問することが始められた。訪問の際にはまず電話でアポイントをとる必要がある。電話のかけ方や玄関先でのあいさつの仕方などに今の子どもたちは慣れていない。どんな恥ずかしがり屋でも訪問するとき、「ツバメの巣を見せてください。」と言わなければならない。一言二言、地域の人と言葉をかわすことによって、日常的に道で出会ったときも、会話が弾むようになる。ツバメのことを話題にして地域が活性化するのではないかと考えたのである。その通りになった。学校の正門のところにツバメポストをつくった。ツバメの情報を手紙にして通りがかりに入れてくれる人も出てきた。電話もかかってくる。それを聞いて児童が学校行事として、クラブ活動として、あるいは放課後を利用して各戸へ出かけて行く。自然と会話が生まれた。その中には独居老人の方もいた。大変喜んでもらう。ツバメの巣で玄関が汚れるので、戸を閉め切ってしまっていた家も、子どもが来てくれるというので、玄関の戸にツバメの出入り口のついた、ツバメ専用の戸をつくってくれる家も現れた。その時の小学生の作文を紹介する。

事例 11

「去年と今年の調査でもう一つ考えさせられたことがありました。この地域はお年寄りだけで暮らしておられる家が多いということです。中にはお年寄りが一人で暮らしているお家もありました。体の調子が悪く、ほとんど寝ている人もおられました。この地域は４人に１人がお年寄りです。地域で考えなければならない問題の一つだと思います。そのようなお家は戸を閉め切ることが多く、ツバメも巣をつくりにくいようです。でも、私たちが調査に行くと喜んでおられました。今年も、学校の田んぼでとれたおもちをついて持って行ってあげます。」

子どもは地域で考えていかなければならない問題点に気付いている。地域の人々との交流を通して自分がどう生きなければいけないのかという問題意識が子どもの中に芽生えている。地域の人々に支えられながら、今度は自分たちが地域の人々をどのように支えていくのか。他者とかかわることによって、自己を経験し、他者理解を深めていこうとしている。

B 地域の小学校はツバメの調査活動を 5 年間続けた後、地域の子どもや大人が参加する「心の教育座談会」を開催した。ツバメの調査活動を媒介として、地域の生活の様子や、様々な課題が見えてきた。「生命を大切にする」という共通の目標と、支え合いながら生きていくことの大切さを共有することができた。

循環サイクル図の要因 3 の円内は他者理解について説明している。他者理解は問題意識の違いを整理・分類しながら、問題解決の方法を集団討論していく過程で形成される。共に体験をする過程で他者理解は深まっていく。「心の教育座談会」は地域コミュニティの「対話」である。共通の目標の下に、生活の在り方を地域で共有し合う機会と場になった。「対話」を通して、生活の在り方に関連している「きまり」を主体的に捉えていこうとする姿勢が子どもたちに芽生えてきた。生活の在り方、生き方に対する姿勢は繰り返されていく中で、態度化に繋がっていく。循環サイクル図の要因 3 と要因 1 の円の重なりは、生活の在り方、生き方への態度化と問題解決能力について表している。

大学生アンケートの要因 2➡要因 3 への関連性の弱さは地域コミュニティの「対話」を通して、行動に価値を見出しながら、生活の在り方、生き方を追求していく過程で克服していくことができると考えている。「きまり」という集団や社会の規範は、自分とは関係のないところにあるのではなく、生活の在り方、生き方として存在し、「生活のきまり」として、そこに価値を見出し、地域における規範行動になっていくことを認識させていく取組（態度化への方向性）が必要である。人間関係形成能力過程としての道筋を実感させていく取組が必要である。集団（社会）の規範化形成には、学校や地域で起こっている現実の問題を解決していく機会や場として、学校の枠を越えた地域コミュニティの「対話」が必要である。そのことを通して問題解決能力が形成されていく。

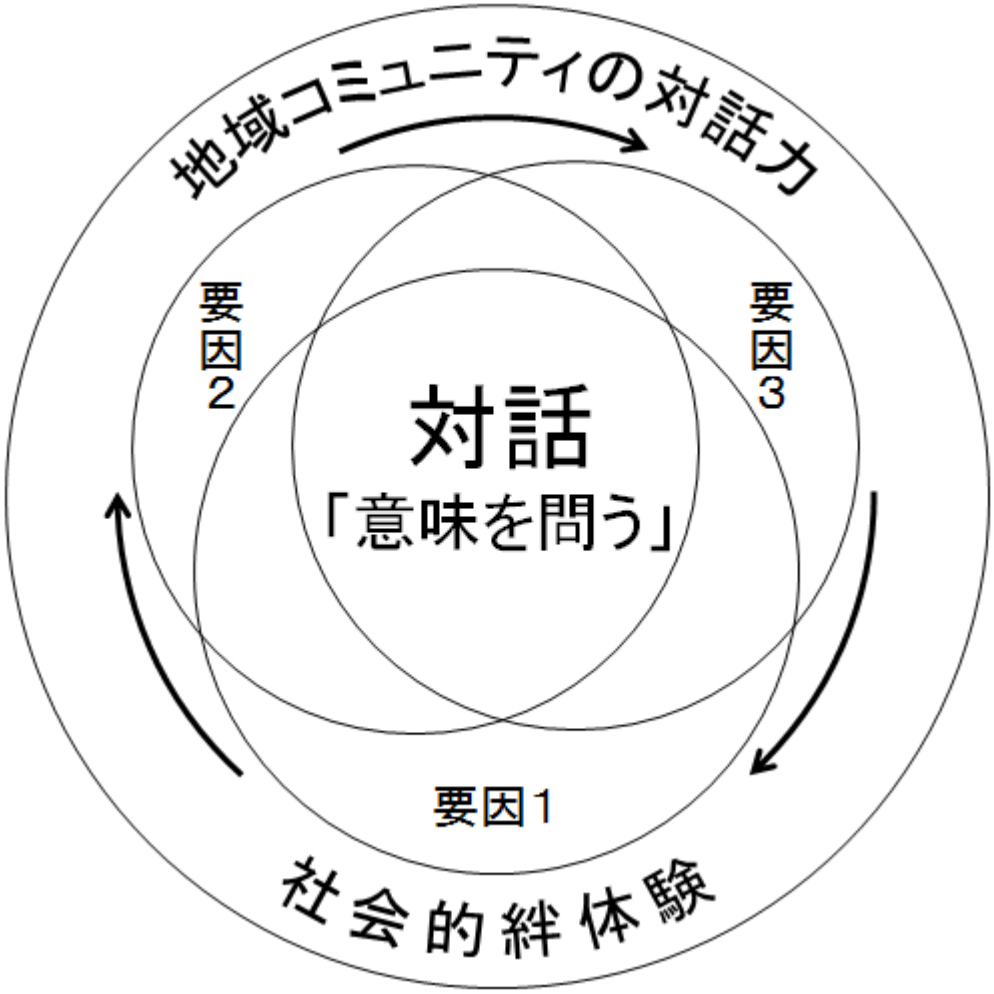
おわりに

集団（社会）における規範意識形成は、地域の共通目標の下、生活の在り方、生き方を共有し合いながら、地域コミュニティの「対話」を通してはぐくまれると考えている。規範意識の希薄化が指摘されているが、その要因は人間関係形成能力過程の中にあると捉えている。本論文では大学生アンケートの要因 1・要因 2・要因 3 を循環サイクル図の要因 1・要因 2・要因 3 と関連させながら、地域コミュニティの対話を通して規範意識がどのように形成されていくのかを事例を基にして展開した。C. ギリガンは『もうひとつの声』の中で、L. コールバーグの道徳性の 3 水準 6 段階発達理論に対し、人間関係を最重視して捉えることが必要であるという視

点から批判している（19)。本論文は、その視点に基づき、人間関係論として展開している。循環サイクル図における要因 1➡要因 2➡要因 3 への展開は、人間がこの世に生を受けてから、人間関係を形成していく過程で、人間形成としてどのように自己実現を図っていくかを循環サイクル図として表現したものである。規範意識形成は人間関係形成能力過程として捉えていく必要がある。心の基盤としての社会的絆体験（要因 1）が自己との対話を通して自己理解を深め（要因 2)、他者との対話を通して他者理解を深めていく（要因 3)。その過程で集団（社会）の規範意識が形成されていく。要因 2➡要因 3 への関連性の弱さは、地域の課題を他人事ではなく、自分事として捉えることにより、地域コミュニティの「対話」を通して、行動に価値を見出しながら生活の在り方、生き方を追求していく過程で克服していくことができると考えている。そのためには学校の枠を越えた「共通の目標」の下に、子どもたちが地域課題に目を向けていく地域コミュニティの「対話」形成の機会や場を、積極的に持つことができるように取り組んでいくことが必要である。

人間形成に関する循環サイクル図

― 自己実現への過程 ―



要因１---思いやり（感性)、支えられる体験、身の回りの人々との対話（感化)、意欲、問題意識

要因２---自己との対話、価値観形成、葛藤、問題意識の違いの整理・分類

要因３---他者との対話、新しい価値観形成、問題解決方法の集団討論、支える体験、態度化、社会性・知性

「注記」

(1)『平成20年版中央教育審議会答申全文と読み解き解説』明治図書、2008年、pp.21-22。

(2) 井上忠司『「世間体」の構造：社会心理史への試み』NHKブックス、日本放送出版協会、1977年、pp.94-97。

(3) 山岸明子「現代青年の規範意識の稀薄性の発達的意味」『順天堂医療短期大学紀要』13巻、2002年、pp.49-58。

(4) T.ハーシ『非行の原因　家庭・学校・社会のつながりを求めて』森田洋司・清水新二監訳、文化書房博文社、1995年、pp.29-48。T.ハーシは少年が非行を犯さないのは、少年と社会との絆が次の4つの要素によって強化されるからだと考えた。

①愛着（attachment）　②生活上の投資（commitment）③巻き込み（involvement）

④規範観念（belief)。

(5) 同前。

(6) L.コールバーグ「段階と秩序―認知発達的立場からみた社会化」『社会化の理論と研究に関するハンドブック』第6章、1969年。

Lawrence　Kohlberg,Stage　and　sequence：The cognitive-developmental approach to socialization.

DavidA.Goslin(Ed.),Handbook of Socialization Theory and Reserch. Rand Mcnally And Co.,Chicago,1969.

L.コールバーグ『道徳性の形成　認知発達的アプローチ』永野重史監訳、新曜社、1987年、pp.34-60.

Gilligan,C. In a different voice：Psychological theory and women’s　development. Harvard University　Press, Cambridge, 1982.

C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、川島書店、1986年、pp.126-130、pp.159-168.

C.ギリガンはL.コールバーグの提示した、道徳的発達段階における3水準6段階の発達段階論に対して人間関係を重視する視点から批判した。

(7) 京都市内の大学における質問紙調査。

(8) 前掲　T.ハーシ『非行の原因　家庭・学校・地域のつながりを求めて』。

(9) 同前。

(10)「NHKスペシャル　孤立集落　どっこい生きる　南三陸町馬場中山集落」NHK,2011年、11月放送。

(11)「いま子どもたちは　震災を生きる$\boxed{1}$」朝日新聞社、2011年、5月朝刊掲載。

(12)「NHKスペシャル　シリーズ東日本大震災　震災遺児1500人」NHK、2011年12月放送。

(13) 前掲　T.ハーシ『非行の原因　家庭・学校・地域のつながりを求めて』。

(14) H.ワロン『児童における性格の起源』久保田正人訳、明治図書、1965 年、pp.90-95。
(15) 前掲　山岸明子「現代青年の規範意識の稀薄性の発達的意味」。
(16) 前掲「NHK スペシャル　孤立集落　どっこい生きる　南三陸町馬場中山集落」NHK、2011 年、11 月放送。
(17) L.コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育―コールバーグ理論の展開と実践―』岩佐信道訳、広池学園出版部、1987 年、pp.145-170。
(18) 京都府内の小学校における実践例。
(19) 前掲　C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、川島書店、1986 年、pp.126-130。pp.159-168。

「参考文献」

井上忠司『「世間体」の構造：社会心理史への試み』NHK ブックス、日本放送協会、1977 年。
C.ギリガン『もうひとつの声』岩男寿美子監訳、川島書店、1986 年。
L.コールバーグ『道徳性の形成　認知発達的アプローチ』永野重史監訳、新曜社、1987 年。
L.コールバーグ『道徳性の発達と道徳教育―コールバーグ理論の展開と実践―』岩佐信道訳、広池学園出版部、1987 年。
T.ハーシ『非行の原因　家庭・学校・地域のつながりを求めて』森田洋司・清水新二監訳、文化書房博文社、1995 年。
『平成 20 年版中央教育審議会答申全文と読み解き解説』明治図書、2008 年。
山岸明子「現代青年の規範意識の稀薄性の発達的意味」『順天堂医療短期大学紀要』13 巻、2002 年.

「付記」

本論文は、2011 年 8 月 19・20 日に宇都宮大学を会場として開催された、日本特別活動学会第 20 周年記念大会　自由研究発表の原稿を加筆、修正したものである。